



日口交流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel: 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



ロシア語教室-上級クラスについて

中村 泰弘

私たちのクラスは毎週土曜日の午前10時から1時間半ほど和気あいあいとレッスンを受けています。ロシア人の先生エレナ・ベドノワさんを大使館からお招きして授業中もほとんどロシア語しか使いません。エレナさんは大使館内にあるロシア人学校の教師をされている方で、生徒に対する面倒見がよく、言葉は明瞭で飾らず率直な物言いをされます。先生の選んで来られる教材はチェーホフの『カシタンカ』やドストエフスキーの書いたキリストの天国に行ったクリスマスツリーの少年の話など、ロシアの小中学生に読ませるようなテキストが多いです。読みながら節目ごとに先生が作家の経歴や作品にまつわるエピソード、書かれた当時の時代背景など簡単な講義を加えていかれます。



文法の教科書・問題集からとってきたようなテキストもよくお持ちになられます。完了体/完了体、形容詞の変化や、最近では同音異義語や、語源が同じだが少しずつ意味の違う形容詞なども用意して来られます。私たち生徒全員立派な大人ですが、まるでロシアの学校に入りなおして授業を受けているかのようです。

授業の前半では、各自が宿題として日本語の記事をロシア語に訳して持ち寄ったものをエレナ先生に順番に添削して頂きます。先代のエレナ（セルゲイエワ）先生から始めた学習法で、題材は日本国内で発信された報道なら何でも良く、生徒は大概単発の短い記事やコラムを選びます。先生は

日本語の文章はお解りになりませんので、ロシア語の作文を読んで意味と筋は通っているかどうかをチェックし、口頭で直して行かれます。

作文は準備の負担があるため半ば自主的な感じで始まったのですが、4人の生徒がみな熱心で今では毎週ほぼ全員が提出しています。私自身この宿題はどちらかというと苦手なほうで、まずは記事とにらめっこしながらロシア語の単語を1つずつ頭に浮かべていく作業から始めるのですが、元の文を一字一句理解できないと訳を省いてよいのかも判断できないので、もれなく記事を読みこなすために相当の熱量を要します。しかし長年ロシア語をやっていて慣れというものがあるのか、昔通訳ガイド試験の受験勉強をしていた時に

とても自分には無理だと思った新聞のコラム「天声人語」の文章が、今は何とかなるかな位に思えるようになっていましたので、継続するというのは大切なことだなと思います。

加えてスマートフォンなどの技術の進歩でキリル文字を打ちかけると単語を次々と提案してくれる、語尾の変化も考えて候補を提示してくれる、文章の文法を校正してくれる、そのような機能はブラインドタッチが出来なかった者にとっては本当に便利でありがたいです。

そんなこんなでどうにか恰好をつけたロシア語の文章をすっきりしたネイティブの文章に直してもらるのが、楽しみとなっています。

上級クラスはその前身の中級クラスを含めて約30年の歴史があり、その間に何人もの先生や生徒の入れ替わりがありました。このクラスから輩出した中には、ロシアのプラント建設現場に派遣されたエンジニアや、翻訳家として作品を残された方も過去にいらっしゃいました。もちろん、とにかくロシア語に触れるのが好きというので来られている生徒もいますし、今の先生も「皆さんに教えることで、土曜の朝からエネルギーをもらっている」と言ってくださり、そんな人たちの出会いの場でもあります。 (常任理事)

お知らせ

●ロシア語クラス生徒募集中!

水曜: 初級1A-1 (19:05~20:05) 初級1A-2 (20:10~21:10)、土曜: 上級 (10:00~11:30)

オンライン準中級 (月曜18:00~19:00)、日曜ゼロからクラス (18:00~19:00)

*事務所では少人数で実施し、消毒液、パーテーション等用意して十分配慮しておりますが、受講の皆様はマスク着用、換気、手洗い等、ご協力をお願いいたします。(緊急事態宣言の際は原則オンラインとなります。) プライベートレッスンも実施しておりますので、ご希望の方はご相談ください。ベテラン講師陣がお待ちしております。

コルド・ナターリア (初~中級)、イローナ・パルフェノワ (中~上級)、タチヤナ・スニトコ (初~上級)、ウラジーミル・ボロビエフ (初~中級)

*事務所での教室も再開しています。

問合せ: 日口交流協会事務局

TEL: 03-5563-0626 e-mail: nichiro@nichiro.org

お願い

NPO日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらかでも結構です。この度は、内堀學氏、松本泰男氏、北澤法隆氏、朝妻幸雄氏、亀田慶一郎氏にご協力いただきました。ありがとうございます。

振込先: 郵便口座00160-9-66486、加入者: 日口交流協会
連絡先: 日口交流協会事務局 E-Mail: nichiro@nichiro.org
Tel: 03-5563-0626 Fax: 03-5563-0752

コラム:

私のロシア語との出会い・ロシア語学習歴(2)

島山 堅蔵

私の手元には2冊の大学ノートが残っています。この2冊は前回述べた「わたしの1年半の行動」の結果です。R社での仕事は「VAZ工場のロシア人研修員へのR社技術者の機械加工に関する講義の通訳」から始まりました。リング製造工程は① casting ② 機械加工 ③ 検査から成り、これに設計・材料が加わります。単にリングと言っても構造が複雑な1st リングの機械加工は40工程以上あります。この全工程の設備・加工条件・治具類などを説明し、ロシア人に会得させるためには、正確な通訳が必要でした。最初私は日本語の技術用語すら知らなかったもので、R社の技術者が翌日行う講義を事前に受け、毎晩和露事典を引きまくってロシア語でなんとか意味が伝えられる様準備しました。その際、調べた単語を毎日1冊目の大学ノートに記載して溜めました。そして、約1年半近くこの作業を続けた結果、前回述べた“全く意識していないでロシア語で通訳していた”感覚になりました。それは毎日毎日ロシア語の環境にどっぷり浸り、夜寝るときも頭の中で、ロシア語がふつつつと湧き上がる状態が続いていた時期におきました。

私がラッキーだったのは、通訳した言葉が正しくない時、ロシア人から訂正が入り、現場で単語がわからない時、ロシア人に“これはロシア語で何と言う？”という質問を先にしてから通訳し、その方法で技術用語を集めることが出来た点です。2つ目のノートは1つ目のノートに蓄積された用語を分野(設計・ casting ・機械加工・メッキ・検査)別に分類して後日整理したものです。その結果、ピストンリング製造に関する技術用語を1,500語以上網羅した資料となり、私の本格的なロシア語学習の起点となり、今ではこのノートは私のロシア語学習のバイブル的存在です。ちなみに以下の様な専門用語が含まれています。Тангенциальное усилие (接線張力)、Эпюр давление на стенку (面圧分布)、Высота

бочкаобразного кольца (バレルフェイスリングのだけ量)、Оправка (雇: やとい)

ロシア語をマスターする過程は(記憶では)以下の通りです。

①ロシア語は子音が多く、最初男性は低音で口を開かないので聞き取り憎い。その点女性の発音は高音で聞き取り易かった。

②同じ人とある程度の期間付き合っていると、その人が使う単語に慣れてきて、理解の幅が広がる。そのようにして慣れた相手を広げていく。

③自分が話しやすい分野(自己紹介から始まって、通常会話のテーマ)を広げていく。最初は文章にしたものを丸暗記して、会話で使用していくことも重要なアプローチ。

④ロシア語を話す際は、頭の中で日本語は思い出さないように努めること。

⑤母国語の日本語の理解範囲を超えて外国語(ロシア語)は使用出来ないの、日本語での理解(語彙・仕事等)範囲を広げる。(商社時代、新人には“まず仕事の内容を覚えること！そのあと外国語は自ずとついて来る！”と説いていました。)

私のロシア語力のピークは2007年4月ー2017年7月の約10年間ロシア駐在していた時で、ロシア人の法律家とロシアの法律につき議論したり、ロシア人だけの業界Meetingに参加して、自分の意見を述べていた時を懐かしく思い出します。今は、個人の趣味のレベルですが、世界的に関心事である“脱炭素”“水素エネルギー”に関してロシア国内の動きを調査してロシア語と接する機会を作っています。今回は私が出会ったロシア人の習性(行動パターン)につき述べたいと思います。(事務局長)

モスクワ「ムゼイ」巡り・その30

バーチャル版トレチャコフ美術館新館

大矢 温

モスクワでロシア美術を、といえ以前ご紹介したトレチャコフ美術館なのだが、実はこのトレチャコフ美術館、現代美術に特化した「新館」がある。ここには「アヴァンギャルド」、「社会主義リアリズム」から「アンダーグラウンド」に至る20世紀、21世紀のロシア芸術が展示されているのと同時に、現代の若手芸術家の展覧会などもしばしば開かれている。シャガールやカンデンスキーなどの亡命芸術家も「ロシア美術」としてここに展示されている。まずは「アヴァンギャルド」から。しばしば20世紀初期の「アヴァンギャルド」芸術は「新しい社会を作ろう、という革命の理念に共感した芸術家たちが作った新しい芸術活動」と説明されるが、実際は後期印象派から抽象絵画への流れは革命前にすでに起こっていた。9番展示室に入ると正面にカンデンスキーの抽象画「コンポジションVII」(1913)、同じ壁面の右側に後期印象派のシャガール「町の上で」(1918)。文字通り町の上に浮かぶシャガールはともかく、イエスの復活、最後の審判、ノアの洪水、エデンの園といった聖書のテーマ

を組み合わせたとされるカンデンスキーの方は全く理解不能だ。

見るものに黙示録的恐怖を与えた」とさえ言われたマレーヴィッチの「黒の正方形」(1915)に至っては、「ただの黒」である。あるいは晩年のスターリン体制下での自分の運命を予感していたのだろうか。

1930年代にスターリンの独裁権力が確立すると、芸術の世界でも自由奔放な「アヴァンギャルド」に代わって、指導者を賞賛し社会主義のすばらしさを宣伝する「社会主義リアリズム」が公式の方針となる。ゲラシモフの「クレムリンのスターリンとヴォロシーロフ」(1938)はその代表作だ。

社会主義体制の明るい生活を描くのも「社会主義リアリズム」の特徴だ。ピメノフの「新しいモスクワ」(1937)。短く髪を切った女性が自動車を運転している。場所はモスクワのボリショイ劇場の前。正面には計画経済の総本山、国家計画局の高いビルが見える(右側の絵です)。

(札幌大学地域共創学群教授)



《モスクワ・アラカルト68》

「岡田嘉子」没後30年によせて

日向寺 康雄

今年2月20日は、戦前の大女優で演出家、というより多くの人の記憶の中に昭和13年正月、当時日本領だった南樺太から極寒のソ連へ愛する人と恋の逃避行を執行した女性として焼き付いている、あの「岡田嘉子」が亡くなって30年になる。二人が目



指した国はもうない。彼女は、ゴルバチョフがソ連邦の存在停止を宣言してからひと月余り後、まるでそれを見届けるようにモスクワの自宅で静かに息を引き取った。この拙いコラムに何度も書いてきた通り、私がモスクワ放送で長く働き、ロシア文化の専門家として曲がりなりにも今生きていられるのも、ひとえに岡田先生のおかげである。私が先生の死の一報を知ったのは、新幹線岐阜羽島駅構内のTVだった。当時私は、モスクワのデフマイムグループの日本初公演に付き添っていた。この日ロ聾者文化交流の扉を開いて下さったのも先生で、出発前の1月25日、病院にお見舞いと御挨拶に伺った時は、身体は確かに弱っていたが頭はしっかりしており、いつものように私を叱った。お別れがこんなに早く来るとは思ってもみなかった。その数日後、黒柳徹子さんから大変温かい慰めのお電話を頂いたことも思い出深い。

その後、世界でも私の周りでも予想もつかなかったような様々な事が起こり、何のめぐりあわせか、今私は多くの大学生を前に「岡田嘉子」という女性について語る機会を得た。中央大学法学部「舞台芸術」では、毎年その最後の授業で先生の生き様を伝えている。1月17日の講義に出席した3年生のNさんは、次のような

感想を寄せてくれたー「私は現在就活をしている。自分のやりたいことは何だろう、自分はどのような仕事に向いているのだろうか、自分の人生をどういうものにするのか、という事をよく考える。そして自分に自信がなかったり失敗す

るのが怖かったりして、つい安全に見える選択肢を選びたくなる。しかしこの授業を聞いて、岡田さんの行動力や好きなものに突き進んでゆく勇敢さを知り、とても勇気づけられた。彼女の人生を通して、もっと自分のやりたいことを実現したいという気持ちになった」。講義ではまた、先生が晩年出演した映画「男はつらいよ(第17作)」の1シーンを紹介した。その中で「(功成り名遂げながらも秘めた愛を貫けなかった宇野重吉氏演ずる老画家が)僕は後悔してるんだ」とつぶやくと、(彼の想い人だった)先生演じるお師匠さんは「じゃあ仮にですよ、あなたがもう一つの生き方をなすುತ್ತしたら、ちっとも後悔しないで済んだと言い切れますか」と応じる。Nさんはレポートを「このセリフは心に響いた。私はかなり悩んでしまう性格であるが、必要以上に悩んでしまう時は、このセリフを思い出して頑張りたい」と締めくくった。

「岡田嘉子」の生き様は、時代を越えて今も、あるいは今だからこそ若い人々を惹きつける。私を叱る時の、先生のお茶目で優しい眼差しがひどく懐かしい。(元モスクワ放送チーフアナ、現中央大学・早稲田大学非常勤講師)

国際放送史研究の戯言No015

年末年始の特別番組『カレンダーリ』

島田 顕

私がいた頃の「ロシアの声」放送モスクワ局の日本語番組には、毎日のニュースと解説以外に、曜日別の番組(コーナー)があった。月曜日は科学と技術(月に一回「ドゥルジバ」という日ロ友好番組)、火曜日は「文化」、水曜日は「スポーツ」、木曜日は「ヤング・ウェーブ」、金曜日は「モスクワ・ミュージック・マガジン」、土日は「お便りスパシーバ」、という構成である。そして年末年始になると各コーナーの特別番組が放送されていた。「文化」ならば、行く年の一年の文化・芸術分野での出来事をふりかえり、新年の抱負などを各分野の方に語ってもらうのである。

年末年始の特別番組は、大体が普通の番組の延長線上に編成され、同じ曜日に放送されるのだが、唯一、通常の番組とは異なり、年末年始だけの番組として編成・放送されるのが「カレンダーリ」だった。「カレンダーリ」とはロシア語でカレンダーのことである。この番組は、新年になってから放送される。まさにカレンダーの如く、1月から12月まで、新年のさまざまな出来事についてふれ、解説する。間には関連する音楽も差し挟む。例えば、「今年〇月〇日は、ロシアの作家〇〇の生誕何周年にあたります」と述べ、その人物の作品・業績について語るのである。もちろん、人物ならば誕生日だけでなく命日も。特にきりが良い、50周年とか、100周年とかの記念日ならば、ふれるのがあたり前であった。今年2022年ならば、「スターリングラード攻防戦開始80周年」(1942年7月17日)とか、「キューバ危機60周年」(1962年9

月)も当然あげられることになるだろう。

私はこの番組に赴任最初の年からかわることになった。担当していた番組の特別番組がなく、特別番組制作からあふれていたところ、先輩のNさんが「一緒に読みませんか」と誘ってくれたのだ。最初は読みだけだったが、Nさんが退職された後は、主に担当することになる。

主に担当するようになってから、やりがいと同時に苦勞も味わうことになった。ロシア人職員が原稿を用意する他の特別番組とは異なり、「カレンダーリ」は日本人職員が原稿を用意しなければならないからだ。まとめ上げなければならないという苦勞の反面、自分の好きな作家や人物・記念日を取り上げることができた。1998年には、一般には知られてはいないロシアの作家ミハイル・コリツォーフ(1898年生まれ)についてふれた。ちなみにコリツォーフは、スペイン内戦をブラウダの記者として取材し、後に『スペイン日記』としてまとめあげた人物である。

種明かししてしまうが、この番組のための種本があった。放送局上層部が編集し、年末に各課に配る白表紙の『カレンダーリ』本である。一般に販売されていないもので、この本から放送したいものを選んでいたので。

やりがいがある番組だったのに一回だけ、最後に担当したときに穴をあけてしまった。このことだけは悔やんでも悔やみきれないほど、本当に後悔している。

考古学者シュリーマンとロシア

畔上 明

古代ギリシャの吟遊詩人ホメロスの叙事詩「イリアス」に詠われた世界を子供の頃から現実のものと信じ続け、のちにトロイヤ文明ミケーネ文明の遺跡を発見したドイツ人考古学者ハインリヒ・シュリーマン(1822-90)、その自伝に描かれているロシア語学習のエピソードに惹かれた方は結構いらっしゃるのではないのでしょうか。

14歳で働き始めたシュリーマンは、ロシア語を学んだことが機縁となってアムステルダム「シュレーダー商会」の雇用で1846年から64年までの20代から40代にかけて18年もの間サンクト・ペテルブルクを中心にロシアを拠点として働くこととなったのです。幼友達でホメロスの詩について夢を語り合ったミンナが結婚という知らせをロシア到着時に知らされ、心機一転、ロシアでの仕事に精を出します。1847年にはロシアの国籍も取得、1852年ロシア人女性エカチェリーナ・ペトロヴナ・ルィジナと結婚、セルゲイ、ナタリア、ナジェジダと一男二女を儲けたにもかかわらず、活動的な夫が商売で飛び回っていたことで夫婦仲に距離が生じてしまいます。1864年にシュリーマンはロシアから離れ世界周遊の旅に出た後1869年にはエカチェリーナと離婚、ギリシャ人のソフィアと再婚に至るのです。現在残されているエカチェリーナからシュリーマン宛てた手紙は180通に



シュリーマンが住んでいたサンクト・ペテルブルクのワシリー島パールヴァヤ・リニヤ30番 (現在28番)

も及ぶのですが。

シュリーマンのロシアに於ける最初の11年間は商会の代理人としての仕事をするかたわら、ギルドに登録されて独自の活動も行い、もっぱら染料のインド藍の取引が功を奏し大儲けをしてモスクワに支店を設けたり、1850年アメリカを訪れた際には丁度カルフォルニアに州が制定された時に当たり合衆国市民となったりもしました。1853-56年のクリミア戦争ではロシアの港が封鎖されたためにサンクト・ペテルブルクに向かう貨物は全てケーニヒスベルクやメーメル(現在のリトアニアのクライペダ)などのプロイセンの港を経由して陸路で運ばれたその利権を得、1861年から始まった南北戦争の影響を大きく受けインド藍のほか、オリーブ油、木綿、木材、茶などで商売の成功をなし遂げ莫大な財産を築き上げたのです。サンクト・ペテルブルクにおいては常に仕事が山積していたために暫く休止していた語学の勉強も、1854年になつてようやくゆとりが生まれてきて再開、何ヶ国語も得意とした語学の範囲は益々広がり、現代ギリシャ語と古代ギリシャ語、アラビア語へと手を広げ、後のトロイヤ発掘(1871-73)に役立つ下準備が整ったわけです。

シュリーマン20代半ばから40代にかけてという人生の最も精力的な時期は、とてつもなく興味が尽きないもののやや誇張されたと言われる自伝を精査するだけでもなかなか跡追いが容易なわけではありませんが、サンクト・ペテルブルクで商才を伸ばし資金を稼ぎ、幻の古代都市の夢をふくらませてゆく、外国商人がそこで大きな利益を上げることが可能であったという環境は注目に値します。

(「プロコ・エアサービス」シニア・アドバイザー)

楽しい防災訓練

野口 久美子

「君たち、ここのひと？」

私とマリウムは振り返った。若いアジア系の男性が赤ワイン片手ににっこり。「私はアルメニア非常事態省救助庁の中尉よ、マリウム。よろしく。彼女は」「わかった、キルギスだ」「…日本人です！」

ここはアルメニアのエレヴァン。NATOがなぜかロシアの庭の筈の旧ソ連国家で「災害対応訓練」をやっているのだ(当時)。私はオブザーバーで参加した。エレヴァン市内のホテルの宴会場で、まずは明日の「災害対応訓練」に備え、パーティが催された。ケーキと紅茶にアルメニアワイン、という女子会のようなメニューには驚きだ。この男性は、アルメニアワインですっかり上機嫌なカザフ人のNATO職員。「君たち、今度ブリュッセルに来たら連絡してよ、案内するよ」ブリュッセルにはNATO本部がある。

ど甘いケーキにかじりついていると、マリウムは会場の片すみの男性を目で指し示した。「誰?」「ロシアよ、彼らもオブザーバーで来てるのよ」「そうなの!?!」「そりゃそうよ、アルメニアは旧ソ連だよ、当然参加ね。それより明日は早いから寝坊しないでね!」ちなみにマリウムは、父親がロシア人だ。

翌朝6時、マリウムにバスに押し込まれ、エレヴァン郊外へ。ここで超グローバルな災害対応訓練の様子を拝見するのだ。照り付ける太陽の下、何もない郊外にポツンとたたずむ古い建設途上のビルの前で、消防車や消防隊員風の人々がい

る。なんと、このビルはソ連時代に作りかけのまま放置されたホテル。「火災消火訓練を始めます」アナウンスが流れて暫くすると、廃墟のホテルから薄く煙が上がった。「今、火災が起きました。消防隊が消火を始めます」消防車が放水を始めた。被害者役を乗せた担架をさっと持ち上げ、救急隊員が敏捷に走っていく。「皆さん!被害者が我々の救助隊により救出されました〜!」

隣の女性がブツブツ文句を言っている。「言語は?被害者が外国人達ならこんなすんなり行くわけない」うーん、確かに…。多国籍イベントならではの意見だろう。

いかにも訓練然とした訓練の後は、お待ちかねのランチタイム。マリウムとビュッフェテントに飛び込んだ。多国籍な人が集まる訓練なので、万人向けの料理がズラリと並ぶ。どこの料理とも言えないが美味しいシチューや、ラザニア風の料理。組織が組織なので、炭水化物やたんぱく質が多めな気がする。味付けもしっかり。これがNATOメシ!「なかなか美味しいね〜」とマリウムもがっついていいる。天気も良いし、皆一様に楽しそう。

2022年の今日振り返ると誠に意外でしかないのだが、防災訓練とはいえ、このような旧東西の集う楽しい牧歌的イベントが、かつてはあったのだ。昨今の世界情勢を鑑みれば、日露関係を常に友好的に注視する我々に、今出来る事はなにか。それは今まで通り、各々の出来る範囲でロシアとの交流を途切れさせないことに尽きるのではないかな。(理事)